 <p>Zambia</p>	学校名: 千葉市立宮野木小学校	● 実践教科等: 道徳科・社会科
	氏名: 多田 幸城	● 時間数 : 11時間 ● 対象生徒 : 小学校6年生 ● 対象人数 : 35人×5学級
[担当教科: 小学校全科]		

### 1 単元名

道徳科: 心のバランス 「C 公正・公平」

社会科: 世界の未来と日本の役割

### 2 単元の目標

**ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)**

- ・誰に対しても偏見をもつことなく、公正・公正な態度で接し、正義の実現に努める。  
(つながりを尊重する態度)
- ・自分の生活と、発展途上国の現状を比べることで、自分の生き方を見つめなおす。  
(未来像を予測して計画を立てる力)

### 3 単元の指導について

#### (1)教材観

本単元は、道徳科の内容項目、「C 主として集団や社会との関わりに関すること」の「公正・公平・社会正義」である。小学校低学年では、自分の好き嫌いにとらわれないで接することを学び、高学年に進むにしたがって、社会正義の実現に努める心を育てていく。特に高学年では、差別や偏見について考えさせたい。自分と異なる考え方や感じ方、少数派の意見などについて、偏った見方をしてしまうことがある。これは、自分より弱い存在があることで優越感を抱きたいという感情に起因するとも言われている。弱者やマイノリティーの存在をそのように扱うことは、いじめなどの問題につながることもある。自分の弱さを自覚し、無自覚のうちに偏った見方をもってしまっている可能性に気づかせたい。

本教材は SDGs の導入にあたる。2015年に、国連サミットにおいて「持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals 【SDGs】」が合意された。最近ではニュースなどでも話題にされる機会が多くなってきたが、教育現場への浸透はまだ十分とは言えない。そこで、本単元の目標の一つは、児童が SDGsを知ることである。そして次の段階は、それをもとに行動することである。単なる知識の習得に終わるのではなく、自分のこととして考え、これからの生活に生かすことをねらっている。だからこそ、本単元の軸は道徳科にあり、自分自身と向き合いながら本教材を扱う意味があるといえよう。

また、社会科の学習「世界の未来と日本の役割」と総合単元的学習を計画している。道徳科だけでは扱えない知識・理解は、社会科の学習と関連させ相互の連携を図っている。本来、児童の思考は教科というカテゴリーで区切られているものではない。各教科の学習が、その時間にとどまることなく、教科の枠を超え児童の生活に根付くことを期待している。

#### (2)児童生徒観

本単元名は、「心のバランス」である。誰も自分のことは大切であるし、恵まれた今の生活を続けたいと考えている。それは間違ったことではないが、一方で困難な状況に置かれている人がいることも事実である。6年生の児童は、その現実を知っている。しかし、どのようにすればいいか、どれだけ心を傾ければいいかわからずにいる。われわれ大人も同じではないだろうか。

児童に、「困難な状況の人や国などに、何かしたことはありますか」と聞いたところ、一番多かったのが募金であった。学校でもユニセフ募金や赤い羽根の募金を実施しているため、身近な行動である。しかし一方で、募金以外の行動は、ほとんど挙げられなかった。児童の行動範囲からも、ボランティア活動などは保護者と一緒でなくては不可能であるから致し方ないともいえるが、別の見方もできる。それは、何か大きな行動でなくてはならないという思い込みである。つまり、普段しないことを特別にすることでなくてはならないと考えているのではないだろうか。本単元でねらっているのは、自分のこととして考え、

これからの生活に生かすことである。特別なことではなく、日常に根付くことである。まずは、児童の意識を転換することから始めたい。

(3) 指導観

誰かのために行動を起こすか否か、その一つの基準になるのが「心的距離」ではないだろうか。知らない人よりは友達を、遠い外国よりは国内を優先する気持ちになるのは、自分と近いと感じているからである。大人になって、出身地が同じだとすぐに打ち解けることも、心的距離の近さから説明できる。だからこそ、児童にとって発展途上国との課題を、いかに身近な問題だと感じることができかがカギとなる。授業の終わりには、SDGsは自分自身が達成を目指すゴールであるという意識をもたせたい。そのための手段として、本単元の授業は、同年代の子どもたちに焦点を当てた。自分と同じように学校に通う子どもたちを見て、「同じところと違うところ」に気付かせたい。児童は違うところに目が行きがちであるが、同じところを見つけることが心的距離を縮める。つまり、算数の授業で同じことを勉強しているとか、自分と同じように夢をもっているなど、同じと感じることが重要である。

4 評価について

児童の学習状況と道徳性に係る成長の様子を見取る視点を以下のように設定した。

- ① 道徳的諸価値について理解したか。
- ② 自己を見つめられたか。
- ③ 物事を多面的・多角的に考えられたか。
- ④ 自己の生き方についての考えを深められたか。

本単元は、道徳科と社会科の総合単元的学習を計画している。したがって、評価も全11時間を通して行った。具体的には、授業中の発言や挙手、ワークシートの記述や調べ学習の様子を評価の材料とした。

5 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1 ～ 3	社会科 「世界の未来と 日本の役割」	・日本の国際交流や国際協力の様子に関心をもつ。 ・写真資料を読み取りながら、自分たちが知っていることなどを話し合う。	○「アフリカ開発会議」にかかわって、世界で活やくしている人々について話し合う。 ・世界には紛争や貧困などが原因で食べ物にも困っている人がいる。 ・教育や医療の劣悪な状況を改善しようとアフリカ開発会議で支援をよびかけている。 ・2013年にも、横浜市でアフリカ開発会議が開かれた。  ○写真資料を読み取りながら、さまざまな分野で、世界を舞台に活躍している人々について話し合い、学習問題をつくる。 ・青年海外協力隊の隊員がオセアニアの小学生に勉強を教えている。 ・ユネスコという国連の機関で、日本人が外国の人といっしょに仕事をしている。 ・サッカーなどのスポーツで世界の人たちと交流し、活躍している人もいる。
4	道徳科 「心のバランス -感じる-」 C 公正・公平	・誰に対しても偏見をもつことなく、公正・公平な態度で接し、正義の実現に努める。	○「自分が幸せだったら、いいんじゃないの」という主発問を中心に、公正・公平について考える。 ・SDGsとは何かを知る。 ・なぜ達成目標を立てるのか考える。 ・心を可視化して、客観的に自分を見つめる。 ・心が変化するきっかけを見つける。 ・思いを行動に移す動機付けを行う。

5	道徳科 「心のバランス -行動する-」 C 公正・公平	・誰に対しても偏見をもつことなく、公正・公平な態度で接し、正義の実現に努める。	○自分の生活や過ごし方を改めて見つめ直し、具体的なアクションを考える。 ・SDGsの視点から、世界をより良い方向に変えるためには、自分には何ができるだろうか。 ・SDGsアイコンのワークシートに具体的なアクションを書き、アイコンごとにグループを作り意見交換をする。 ・考えたアクションを発信しよう。
6 ～ 11	社会科 「世界の未来と 日本の役割」	・日本の国際協力の様子及び平和な国際社会の実現に努力している国際連合の働きを理解する。 ・世界平和の大切さと、我が国が世界において重要な役割を果たしていることを理解する。 ・関係者への聞き取りや各種資料を活用して集めた情報から、青年海外協力隊やNGOの活動の様子、願いや苦勞などについて、読み取る。	○世界の平和を守るための活動をしている国際連合の組織や働きについて調べる。 ・世界の 193 か国が加盟している(2013年)。 ・国際連合の中には、ユネスコやユニセフなどの国連機関がある。 ○ユニセフの活動について調べ、国際連合の働きや目的について考える。 ・ユニセフの活動によって、世界の多くの子どもたちが助けられている。 ・国際連合は、世界の平和と安全を守り、人々の暮らしをよりよいものにするために活動している。 ○写真やグラフ、地図や文章資料などから、NGOや青年海外協力隊で活躍している人たちの様子について調べる。 ・日本のNGOも医療や環境などの分野で国際協力の活動を行っている。 ・青年海外協力隊はアジアやアフリカ、中・南アメリカなどの発展途上国や地域で活躍している。 ○国際協力の活動にたずさわる人々の思いや願いについて考える。 ・貧しい人を助けるのと同時に、現地の人の育成が大切である。 ・活動をする際に大切なことは、必要とされる場所を探すこと。

## 6 授業事例の紹介

小単元名【心のバランス-感じる-】

### (1) 指導案

(ア)実施日時 10月30日(火)第5限

(イ)実施会場 6年1組教室

(ウ)本時の目標

誰に対しても偏見をもつことなく、公正・公平な態度で接し、正義の実現に努める。

(エ)指導のポイント

- ・公正・公平の視点から SDGsをとらえることで、支援や援助をしてあげるという考えではなく、ともに幸せな社会を築くという考に気づかせたい。
- ・きっかけがあることで心に変化が訪れることを、授業者の経験を伝えることで理解させたい。
- ・開発課題を遠い国の出来事ではなく、自分の問題として考えさせたい。
- ・心の中を可視化することによって、建前ではなく自分ならどうするか考えさせたい。

(オ)本時の展開

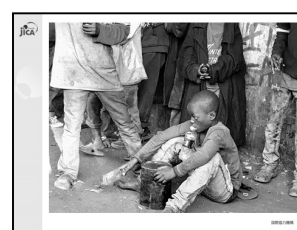
過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
	<p>SDGsについて知る。</p> <p>公正・公平について考える。</p> <p>子どもの視点から、SDGsを生活に生かす。</p>	<p>1. 何のマークだろう。見たことあるかな。 ・はじめてみた。 ◇実は、こんなところにもあったんだよ。</p> <p>2. SDGsってなんだろう。 ◇SDGsとは、2030年までに達成する目標。 ◇世界をより良い方向に変えていく目標としてSDGsがある。</p> <p>3. それぞれのアイコンは何を表しているのだろう。 ・アイコンに説明が書いてあるよ。 ◇でも、日本には関係ないと思っていない？</p> <p>4. なぜ、このような目標を立てるのだろう。 何もしないのは、だめなの？ ・もっとひどくなる。 ◇日本はそんなに困っていないよ。 ・日本のことだけを考えていてはだめ。</p> <p><b>5. 自分が幸せだったらいいんじゃないの。</b></p> <div style="text-align: center;"> <p>自分                      みんな</p>  </div> <p>◇SDGsのキーワードは「誰ひとり、置きざりにしない」</p> <p>6. 思いを天秤で表してみよう ◇「こころのバランス」を保つことが大事。 どちらかに傾きすぎては不安定。</p> <p>◇こころのバランスが変わるときは、何かきっかけがある ・先生のきっかけは…。</p> <p>7. みんなの生活にもSDGsを当てはめてみよう。できそうなことはなんだろう。 ・②は給食を残さない。 ・⑤は男女仲良くということかな。 ・①②はリサイクルに取り組む。</p>	<p>一斉</p> <p>個別</p> <p>個別 → pair</p> <p>個別</p>	<p>(資料) ・SDGs17種アイコン ・SDGs全体アイコン ・エコメッセパンフ ・少年自然の家：写真</p> <p>(資料) ・日本SDGs達成状況</p> <p>(資料) ・ザンビアの写真 「同年代の子」 ・写真絵本『すごいね！みんなの通学路』</p>	<p>発言</p> <p>WS</p> <p>WS</p>

## (2) 授業の振り返り

ほとんどの児童は、SDGsを知らなかった。しかし、宿泊学習で訪れた少年自然の家の写真を見せたところ、「あった」という声が出てきた。17の目標のロゴも提示しながら、どのような内容なのかを説明したのち、なぜ、このような目標を立てるのかを質問した。社会科で学習したこともあり、世界のため、地球のためという意見が児童から挙げられたが、そこであえて、「日本は、そんなに困っていないよ」と聞き返した。そして、「自分が幸せだったらいいんじゃないの」と、児童の目線に立った発問を投げかけた。正しい答えを聞きたいのではなく、自分の心はどうなんだろうと考えさせ、自分自身に改めて問い直す時間を設けた。本時では天秤を例に出し、自分とみんなという軸で、どちらに重きを置いているか、心を可視化して考えた。児童からは、「やっぱり自分も大事だから」や、「全部みんなに傾くと自分がつらくなる」など、自分と照らし合わせながら考える姿が見られた。また、「自分とみんなの間を揺れ動いている」など、迷いや戸惑いを表現した児童もいた。

最後に、JICA 教師海外研修で授業者自身が訪れたザンビアの写真を見せながら、授業者の天秤の傾きが変わったきっかけを話した。この授業が、児童にとってのきっかけになればうれしい。

## (3) 使用教材、参考資料等



## 7 単元をとおした児童生徒の反応/変容

物理的な距離として、ザンビアは遠い。日本と比べて、文化や人種が異なるため親近感は抱きにくいというのが授業前の児童の正直な気持ちだろう。それでは、授業を通してそれらの気持ちは変化したのだろうか。まずは単元の流れに沿って、児童の様子を振り返りたい。

はじめに、社会科の学習の中で「アフリカってどんなところだと思う？」と質問した。児童からは「ライオンがいる」、「裸で生活している」、「狩りをしている」、「ジャングルがある」、「熱い」、「砂漠がある」、「食べ物がない」などが挙げられた。授業者がアフリカをひとくりにしているところも問題ではあるが、児童はいわゆるステレオタイプのイメージをもっていることが分かった。実際は国や地域によって状況は異なるのだが、私自身も以前は児童と同じような感覚であった。

本単元の前には、社会科で輸入と輸出の関係は、互いに支え合っていることを学んでいる。印象的であったのは、経済的な指標で、日本は中国に抜かれていると伝えたときの児童の驚きである。今や中国は世界の経済大国である。しかし、中国のイメージは半世紀前のままである。国のイメージは固定している。そう感じた。そこで、発展学習として、世界各国の写真を提示し、どこの国か当てるゲームを行った。ベトナムは急激に発展して高層ビルが建築されていること。アラブ首長国連邦では、砂漠の中に近代的な街が作られていること。一方で、経済発展がうまく進まずに多くの問題を抱える国など、クイズ形式で理解を進めた。そのことによって、自分の暮らす日本について目を向けるきっかけが生まれた。

中心となる道徳科の授業の様子は前述した通りだが、授業後にうれしい出来事があった。児童がSDGsのロゴ探しを自主的に行ったのである。「見つけたよ」と教えてくれた場所は、企業広告やニュース、なんと海外旅行先でも見つけて報告してくれた。SDGsのロゴを知り、それを探することは「はじめの一步」と呼んでもいいだろう。児童自身が大きな活動をするのは困難を伴うかもしれないが、多くの児童が「はじめの一步」を踏み出せば、それはやがて大きな一歩になりうる。本単元の学習が、世界を変える「はじめの一步」に貢献できたのであればうれしく思う。

## 8 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

残念なことに、物理的な距離や文化・民族・宗教の違いは、心的距離を広げて遠くのどこかの話になってしまう。だからこそ、現地に行くことは重要である。それが書籍やWebの断片的な情報とつながり、真の知識となる。だからと言って、世界中の国や地域を訪れることはできない。今回のJICA 教師海外研修でも同じである。現地を訪れたことがない先生でもできる授業計画を作成するのは、研修に参加した我々の責務である。また、開発教育のための特別な授業よりも、現在の教育課程にエッ

センスとして加える程度が丁度いいだろう。普段の授業の中に、開発教育の視点が加わる。そんな自然な形で学ぶスタイルが理想ではないかと考える。そのような考えのもと授業づくりが始まった。

授業づくりでは知識を伝えるのではなく、考えさせることを重視した。

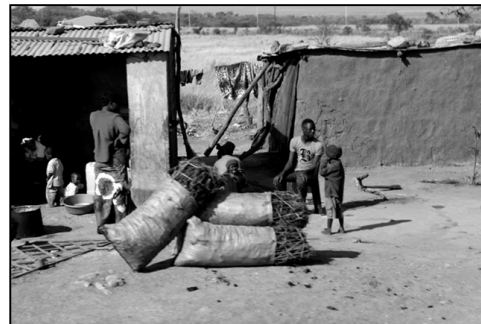
## 9 教師海外研修に参加して

貧しい国がある。かわいそうだから募金する。使わなくなったものを送る。典型的なステレオタイプであった以前の私は、そのように思考していた。募金や物を送ることが間違いだというのではなく、その背景や影響を考えずに、短絡的に行動することが間違いだと気付いた。実体験を伴わない知識は、ときに先入観を生む。本研修は、そういった概念を根本からリセットする貴重な経験となった。

現地を訪れ、産業とインフラの未発達、貧困と健康の問題、それらすべてを好転させるために教育に希望を見出す関係者の思いに触れ、国は異なるが、同じ教壇に立つものとして自らの職責を再確認する機会となった。また、貧困率が高いと聞かされていたザンビアの首都ルサカに着いた瞬間に、自らの「貧困」の定義が間違っていたことに気付かされた。それは、貧困とは国全体が貧しく都市の発展も遅れているのではないかという思い込みがあったことを意味する。首都のルサカは、大型のショッピングモールや整備されたスタジアムなど、日本の地方都市を上回るのではないかと状況である。では、貧困とは何だろうか。それは、町の中心部を離れた際に分かった。そこには、広大なコンパウンド(未計画住居地:スラム街)が広がっていた。上下水道の設備はなく、コレラが発生するなど、高い人口密度と劣悪な衛生環境があった。また、地方の農村部に行くと、電気も水道もないなか、木を切って炭を作り、幹線道路の道端で売る姿が見られた。まさに、この格差が貧困である。一部の富裕層と外国資本の企業が富を得て、大多数の国民は生活に困窮しているのである。

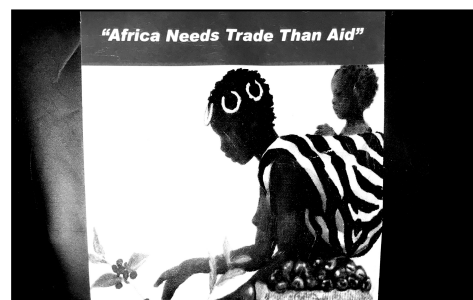


<首都のルサカ中心部>



<幹線道路沿いで炭を売る人々>

それでは、このような開発課題にどのように向き合えばよいのだろうか。研修以前の私の考えは、資金の寄付や物的な援助を挙げたであろう。そこには、かわいそうという同情の気持ちが根底にあるのだと思う。しかし実際は、資金援助だけでは解決しないことが分かった。研修中に幾度も聞いた言葉“Ownership & Sustainability”。開発途上国の自助努力と持続可能性。援助を一方向的に与えるのではなく、パートナーシップによってそれを解決するという考え方は、本研修で得た成果のひとつである。いみじくも、お土産に買ってきたコーヒー豆に“Africa Needs Trade Than Aid”と書かれていた。これは、数少ない、Made in Zambia の製品である。



<Zam Coffee のパッケージ>

また、キーワードは「人」であった。ザンビアのナショナルサイエンスセンターでは、「教育においてアフリカの中心になる」ことを目指して、教員研修センターの建設が進んでいた。子どもたちを教育することが最優先課題であり、子どもたちに未来を託しているのである。また、JICA の国際協力においても、人的資源を投入し、人を育てることを重視しており、資金援助を中心に行う他のドナーとの考え方の違いを知ることができた。私も人を育てる教師である。今までの国際理解教育・開発教育は「知る」ことを中心に授業を行っていたが、これからは「考え・気付き」「行動する」ところまでをねらっていきたい。そのためのツールとして SDGs を導入する価値は大きい。教育現場における SDGs の認知度はまだまだ低い。本研修における授業実践がその普及の一助となれば幸いである。